



私を導くはたらき

本願寺派 司教 井上 見淳

一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり 『歎異抄』 第五条

この一節は親鸞聖人が、これまで多くの生まれ変わりを経てきた自分は、どの「いのち」とも、かつては父母であったり、兄弟であったりしたに違いない。だから今生で縁のあった父母だけではなく、このたび浄土に生まれたなら、どの「いのち」も救わねばならないのだと「いのち」に対する深い視野を開いてくださったお言葉です。

しかもおもしろいのは、そうおつしやりつつも最後の所では、仏になった時は「まづ有縁を度すべきなり（まず縁の有った者を救いなさい）」と私たちの心情に即してあたたか

く語られているところです。

さて、私の妻は広島県北広島町の芸北という山深い静かな町の出身です。まるで「となりのトトロ」のような風景が広がり、冬はスキー客で賑わいますが、高齢化・過疎化の進む地域でもあります。この地域の特徴は、何と云っても浄土真宗のたいへんな篤信地ということ事です。妻いわく、「真宗以外のご家庭がないんじゃないかしら」というほどで、どの公民館（集会所）にもたいがいお仏壇があり、自治会の会合は、全員で「正信偈」をお勤めし、法話を聞いてから始まります。報恩講はお寺の法座とは別に、各ご家庭で一時間程度かけてしつかりと行われます。またお寺の前を通る時には、車であろうが、誰彼となく頭を下げて通過します。あちこちで阿弥陀さまを「親さま」と呼び、お念仏が聞こえる。そんな浄土真宗が生みだした宝のような場所です。

私が驚いたのは、今はもうお浄土へ先

だった妻の祖母が、ある時、近所の飼犬を撫でながら何か話していました。近づいてみると、「あんたは、次は人間に生まれんさいよ。そして阿弥陀さまにあわせてもらいんさいね。よしよし」と話しかけていたのです。私は心底、感激しました。

今、私はふと思うのです。親鸞聖人が「まづ有縁を度すべきなり」と語っておられました。あの撫でられていた「飼い犬」も、あの会話を私に聞かせ、お念仏の大切さを伝えるために現れてくださった、私のいつかの「有縁」の方ではなかつたらうかと。

冬の報恩講の時期になれば、今もあの山のあちらこちらで、いや日本全国のお寺でご法座のともしびが輝き始めます。本堂の中は、きつと親鸞聖人のみ教えを楽しみに聞きに集まる方々で、賑わっていることでしょう。

「日々の暮らしと、『歎異抄』（本願寺出版社）より引用

この冊子は西照寺書庫にあります



他の人のために

本願寺派 勸学 普賢 保之

二〇一九（令和元）年七月五日の夜九時頃、携帯の着信音が鳴りました。電話の主は月参りにうかがっているお家の女性でした。「夫が先ほど息を引き取りました」。亡くなられた方は、三年前に胃がんの手術を受けて、呉服の仕事に復帰していました。

面倒見のいい方でした。二〇一一年（平成二十三）年の三月十一日（東日本大震災が起きた時）のことです。大学では四日後に卒業式を控えていました。私が仏教学を担当した学生が代表で卒業証書を受け取ることになっていました。彼女の実家も大きな被害を受けました。母親が晴れの舞台で娘に着せる着物を持ってくる予定でしたが、京都まで来られる状況

ではなかったのです。学生はスーツを着て卒業式に臨むつもりでいました。

わが家でその話をする、家族から「なんとかしてあげてよ」と言われました。「そうは言われても…」と返答するしかありませんでした。しかし、その時に思い出したのが、呉服屋のご主人の顔でした。思い切つて電話をしてみると二つ返事で快く立派な着物を貸してくださいました。後日、卒業生とお礼にうかがうと、卒業を一緒に喜んでくださいました。

そのご主人も娑婆の縁が尽き、お浄土に往生していかれました。阿弥陀如来のはたらきにより浄土へ往生し、阿弥陀如来と同じさとりを開かれたのです。それはわかかつてはいても、親しい人との別れは凡情の身にはやはり寂しいものです。

親鸞聖人のお手紙（御消息）の中に「浄土真宗は大乗のなかの至極なり」

とあります。阿弥陀如来の本願が大乗の教えのなかでも、最も勝れた教えだと示されています。それは自分一人がさとりを得るのではなく、他のすべての人々をさとりの世界へと導く活動ができるようになるからです。

すでに浄土に往生されたご主人も、阿弥陀如来と同じさとりを開いていることはもちろんのこと、常に私たちを見まもり、大慈大悲のはたらきかけをしてくださっています。そして臨終にはお浄土へと導くようはたらいてくださっているのです。

今生でも他の人のために一所懸命はたらき、往生してからは阿弥陀如来とともに、私たちがさとりの世界へと導くはたらきをしていてくださっています。恩愛の情は絶ちがたくはありますが、感謝の念を持ってそのはたらきに身をゆだねていきたいものです。

『香りが染みついていくように』（本願寺出版社）より引用
この冊子は西照寺書庫にあります



「聞く」ということー「聴」と「聞」ー

本願寺派 司教 内藤 昭文

「百聞は一見にしかず」といいますが、眼に見えたものほど間違いないものはないと思いがちなのではないのでしょうか。

の重要さが分かります。(中略)

ところで、ご法話の席でよく耳にする「聴聞」という言葉があります。私たちもよく使う言葉ですが、みなさんはこの「聴」と「聞」の違いをどう考えていますかー今日では同じようにしか使われていないように思いますがー。

世事の中で私たちが聴いているのは、私の欲望にもとづいて聴こうとしていることばかりであり、私にとって都合のよいことばかりです(ややもすると、都合の悪いことは聞こえてきても、聞こえなかつたことにしてしまいます)。

仏教では、「聞・思・修」の三つの智慧(三慧)ということを行います。つまり、①教えを聞いて生じる智慧、②その教えを思惟して生じて生じる修慧、の二つです。ここには「聞く」ということ「見るともつく智慧が語られても、「見る」ということ」にもとづく智慧が語られません。言い替えれば、「聞」によつて仏智を得ることはあつても、「見」によつて仏智を得ることはないのです。しかも、この①②③の順序は常にこの順番で説かれますから、最初の「聞」、つまり教えを聞くこと

今日の日本語で区別すれば、「聴」とは「きく」ことであり、「聞」は「きこえる」ことであるといわれます。私たちは日常の世事に追われ、その毎日の出来事に眼を奪われ、追認するだけで四苦八苦しています。そういう生活の中で、仏法とは、私たちが「聴」こうとしなければ「聞」こえてきません。しかし、「聞」こえてきたのは、私が「聴」いたからではありません。すでに仏の方から「聞けよ、聞けよ」と呼びかけられ、仏の方が説き示されていたことに気付くのです。それが、自力が否定された「他力(＝仏力)」です。

前節で触れたように、阿那律は釈迦さまから居眠りを叱責(注意)されました。誰にでも居眠りして叱責された経験ぐらひはあるでしょう。しかし、えてして私たちがそのような叱責に対して言い訳をしたり、あろうことか逆恨みさえしかねません。これは「聞」の姿勢ではないでしょう。「聴」こうとする姿勢の大切さと同時に、「聴」こうとして「聞」こえてきたことを、素直にしっかりと受けとめることこそ「聴聞」の姿であり、それこそ聞慧をいただく第一歩だろつと思ひます。

『仏伝に聞く仏教』(探究社)より引用

この本は西照寺書庫にあります

また、掲載文字数の関係で、一部中略してご紹介しています



仏道を歩む

熊本市普賢寺住職 菊城 淳真

仏教は、仏法であるとともに、私

が歩むべき仏道です。(中略) 仏

教の経典とは、仏さまが示された

頂上まで登れる道を示した地図で

す。迷いの世界に居るものが教祖

気取りで作った道は麓から見るとど

んな立派な道であつても、頂上まで

は行けない迷路でしかありません。

このような頂上まで続いている

「小路」に迷い込むことなく、仏道

を歩むとは、「大道」を体解するこ

とです。

しかし、頂上まで登る道は、一本

だけではありません。その登山道

が、たくさんあります。宗派です。だか

ら、仏教にいろいろな宗派がある

というのをおかしいことではあり

ません。病に病じて薬を与える

応病与薬、機(人)に対して法を

とく、対機説法というのがお釈迦さまの導き方ですから、いろいろな道があつていいわけです。

しかし、道は歩まなければどうしようもありません。涅槃経には、仏道は

「道」あることを信じるばかりではいけない。悟りを開いた「得者」を信じる

ということが具わつて信心は成り立つと

あります。仏教は如是我聞の教えです。

聞くことによつて道を歩くことができま

す。しかし、聞くといつてもただ言葉ばかりの「聞」では不十分です。そこに

「思」という教法のいわれを十分聞き分

けて、如是、仏の仰せのままに思い知

ることがあつて完全なものになる、と説

かれていきます。

道に、大きくは三つあります。一つ

は、仏さまから聞いた山への登り方のマ

ニュアルを手がかりに自分の脚力で登る

方法、もう一つは、自分の車を運転し

て登る方法、半分は自分の力、半分

は車の力を借りて登る方法です。三番目は、如来さまに麓まできていただいた如来さまの運転される車にお任せして

登る方法です。この第三番目の方法を絶対他力の仏道といひます。

親鸞聖人は「濁世の道俗、よくみづからおのれが能を思量せよ」と濁つた世

に生きる出家の者も在家の者も、よく自分の能力を考えよと言われ、たとえ

道はあつても自分の器量、能力を考えるとき、第三番目の本願念仏の仏道の

ほかに、凡夫が登れる道がないことを教えられました。

論外なことですが、まず、私自身に登

ろうという意志がなければ問題になり

ません。仏道は、どの道がよいかという

優劣を問うのではなく、いかにすばらしい道であつても私が登れなくては無意味

なものになります。そして私が登れる

如来さまに選ばれた道こそが、私にとつ

ての唯一の仏道です。

『二尊の大悲にめぐまれて』

(菊城淳真先生 喜寿記念著述・講演録集) より引用



鏡の問い

本願寺派 司教 内藤 昭文

私が龍谷大学に入つてしばらくしたとき、ある先生に尋ねられた質問です。

その先生から「内藤くん、鏡は右と左、反対に映りますね」と尋ねられ、素直に「はい」と答えました。すると、「どうして上下は反対に映らないのですか」と、再度尋ねられたのです。この問いに対して、皆さんならどう答えますか。

私はその時、即答したのですが、「違う」と言われ、宿題にさせていただきます。その後、先生に会うたびに尋ねられて答えるのですが、そのたびに「違う」と言われ続け時間が過ぎました。私はもうこの話題から逃れたいと思い、先生に答えを聞きました。ですから、私はこの問題に答えられたわけでは

ありません。先生から教えられた答えは、単純なものでした。

それは「内藤くん、鏡は、右と左、反対に映つてはいないよ」というものでした。この時、私は少々驚きましたが、自分が鏡に映っている姿を思い出してみると、先生の言われる通りです。鏡は右にある物を右に、左にある物を左に映しているだけです。だから、上にある物を上に、下にある物を下に映しているだけです。

この質問を受けるまで、私は、鏡といるのは右と左が反対に映っていると、思つて日暮らしていました。あれから四十年以上が経つていますが、今でも、朝、鏡を見ていると「右左、反対だな」と思っている自分に気がつきます。どうして私たちは鏡を見ると、右左が反対だと思つてしまうのでしょうか。先生と仏典を解説しながら仏教を学ぶ中で、私なりに気がついたことは「私たちが自

分中心にしか鏡を見ていないからだ」ということです。私たち人間（凡夫）はいつでもどこでも、何に対しても、自分中心にしか見ることができないのです。ですから、鏡は左右反対に映つていると思ひ込んでいるのです。本当に左右反対に映しているか、そのことを考えないまま、時間が過ぎていたのです。（中略）

人間の自分中心性を自覚することはなかなか難しいことです。だからこそ、お釈迦さまの教え、すなわち「仏教」に出遇うことによつて、気づかされていくことが大切なのです。それが仏教に出遇うということだと思つていきます。

私は、自己中心的な見方をモノサシとして、それを正しいものだと、仏典に伝わる言葉だけでなく、あらゆる物事を考えてしまつていました。それでは本当の意味で仏教に遇つたことにはならないということを私に、先生は「鏡の問い」で伝えて下さつたと思つています。

『そのままの救い』（龍谷大学宗教部）より引用

掲載文字数の関係で、一部中略してご紹介しています



大いなるはたらき

本願寺派 布教使 藤田 徹文

よくわからないけれども、一生懸命何かにするが、何かを拝むことによつて「しあわせ」というか、「ご利益」をいただくのが、「信心」であると思つておられる方があるかもしれません。

仏教でいう「信心」とは、自分の「いのち」の本当のあり方に目覚めることなのです。私たちの「いのち」の本当のあり方とはどういうことなのでしょう。

「いのち」は、決して自分一人で生きているのではないのです。多くの「いのち」や「もの」とのつながりの中で、生かされて生きているのです。そのことに、目覚めることです。

時間からいうと、私たちの「いのち」は、いつからのつながりなのか

よくわからない、長い長い縁があつて、今、ここにあるのです。そのことを仏教では「無始より」、「久遠の昔より」、「曠劫よりこのかた」の「いのち」であるといひます。

また、広がりからいうと、私たちの「いのち」は、ここからここまでというような狭い範囲というか、小さな世界の中で生きているではありません。

「無辺際」といわれるような、ほとりのない広い広い世界の真ん中で、生かされているのです。

さらに、量的にいうと、時間・空間、無限の広がりをもつた広大な世界のすべての「いのち」や「もの」、文字通り量ることができないほど、数限りない「無量」なるものとのつながりの中で、生かされて生きているのが、私たちの「身」（いのち）なのです。

私は私一人で生きているのではないの

です。お釈迦さまは、この世で他と全く関わりなく単独で存在しているものはないと教えてくださいました。無量なるものがすべて一つになつて、私を生かしてくださいさる大きな「はたらき」となつて、私を私たらしめてくださつていふのです。（中略）

大いなる「いのち」の世界から、「どんな時でもあなたの『いのち』を支えている私がいますよ」と喚びかけてくださるお言葉が、「南無阿弥陀仏」です。

その御名（お名号）を通し、またお姿となつて、私たちに向かい合つてくださつていふのがご本尊なのです。

「南無阿弥陀仏」のお名号とご本尊のみ名とお姿を通して、私が私として生きていふ「いのち」の世界、広い広い「いのち」のあり方に目覚める、それを「信心」といふのです。

『浄土真宗やわらか法話2』（本願寺出版社）より引用
掲載文字数の関係で、一部中略してご紹介しています



人間は一人では生きられない

本願寺派 前門主 大谷 光真

今日の世の中には、さまざまの呼び声が飛びかっています。商品を売るためにかかってくる電話、届けられる手紙は、少なくありません。しかし、その多くは、むなしく消えてしまいます。真実の言葉に遇うことは、やさしいことではありません。

そうした中で、人生というむずかしい迷路にさまよう私に、自ら名乗り、よびかけてくださる阿弥陀如来に遇わせていただく喜び、安らぎを、味わいたいと思います。そして、このまことの言葉、「南無阿弥陀仏」を身にいただくものは、この世の縁が尽きたときに、お浄土で阿弥陀さまと同じさとりを開くのです。お浄土は、阿弥陀如来の光と生命の躍動の世界です。

お浄土に生まれるまでのこの人生、それは、自分の中にある闇や恐ろしいものを取り除いてしまうものでなく、蓋をして閉じこめてしまうのでもなく、闇を抱えたままに、光の中に生きることあります。それは、阿弥陀さまのおよび声に応え、生きることではないでしょうか。

そこに、高ぶらず、ことさらに卑下せず、「御同朋御同行」と手を取って歩む道が開かれています。お互いに不完全な人間であることを認めただ上、助け合っていくのです。自分だけの幸せ、自分の家族や国家の繁栄を喜んでいるだけでは、周りの人びとを傷つけているかもしれないことに気がつきません。すべてのものは、相い依り、相い助け合って成り立っているというのが、お釈迦さまの縁起の教えです。

人間は、一人で生きることができません。今日では、国家も、孤立しては

成り立たない時代になりました。そうしたことを思いますとき、私たちの日常の小さな出来事、私たちの行いが、人類の大きな課題につながっていることを、思い起こしたいものです。天然資源の浪費や環境の汚染は、私たちの子孫へ、とんでもない遺産を残すこととなります。

私たちは、今、むずかしい問題が与えられています。その中で、「お念仏に生かされる喜び」とは、どのようなことでしょうか。

「念仏者は無碍の一道」である、とおっしゃった親鸞聖人のお心は、このような問題に目をふさいだまま、お浄土への道を歩むものではありません。私たちの不安をかきたてるもの、醜い欲をそそる甘い言葉の中にあつて、阿弥陀さまのお言葉、「南無阿弥陀仏」とともに、精一杯の人生を歩ませていただくのです。私たちのお念仏の生活を通じて、子や孫に、そして世界に、お念仏が伝わってきます。

「さとりと信心」(本願寺出版社)より引用
この本は西照寺書庫にあります



自他平和

筑紫女学園大学 元学長 小山 一行

すべての人々は暴力を恐れる。
すべての人々にとって生命は愛しい。
自分におきかえてみて
殺してはならない。
殺させてはならない。

（『ダンマパダ』）

人と人との対立は、家族と家族
の関係にも連なり、やがて社会に
おけるさまざまな組織体の関係に
拡大し、ひいては国家や民族の間の
戦争という問題を引き起こします。
そこに最も欠けているのが、「自分
におきかえてみて」という視点であ
るといえるでしょう。

与那国島に住む安里有生くん
という小学一年生の男の子が、
二〇一三年に行なわれた沖縄戦の
全戦没者を悼む式典で次のような
詩を読んで評判となり、絵本にも

なっていることをご存知でしょうか。

へいわってなにかな ぼくはかんがえた
よ おともだちとなかよし かぞくが
げんき えがおであそぶ ねこがわら
う おなかがいっぱい やぎがのんびり
あるいてる けんかしてもすぐ なか
なおり （中略）

へいわっていいね へいわってうれしいね
みんなのころから へいわがうまれる
んだね これからもずっとへいわがつづ
くように ぼくも ぼくのできること
から がんばるよ

（『へいわってすてきだね』ブロンズ新社）

いかにも子供らしい表現ではあります
が、平和とは何かという本質を見事に
とらえているではありませんか。困難
な状況の中で平和運動に取り組んでお
られる方々から見れば、観念的理想論
に過ぎないという批判もあるかもしれ
ません。個人と個人の関係のあり方と、
国家社会の軋轢から生じる戦争という

問題は次元が違うという意見も有り得
るでしょう。

しかし、あらゆるいさかい、もめごと
を鎮める道は、自と他との垣根を超え
て共感しようとする姿勢に帰するとい
う意味で、「みんなのころからへいわが
うまれるんだね」というのが真理であり、
その実現のためには、一人ひとりが「で
きることからがんばる」よりほかはない
のでしよう。

『みちしるべ 正しい努力』（仏教伝道協会）より引用
この本は西照寺書庫にあります

今日八日は、小山一行先生の一周忌です。
先生は「自他平和」という言葉について、「自
分の心が安らかになるだけでなく、自分と
他の人との関係が穏やかになる道は、自我
にとらわれていることに気づくことから始ま
る。」と、ご自身のお寺の寺報にて解説をさ
れていました。「自我にとらわれていること
に気づく」とは、言い換えれば「どこまで
も自己中心的な私であることに気づく」と
いうことでしょう。自分本位にしか生きら
れない私だからこそ、「自らにおきかえてみ
る」という視点が大切なのです。 住職



プンダリーカ

びやくれんげ
—白蓮華—



角のある念珠

本願寺派 勸学 霊山 勝海

先般、博多から広島へ帰ろうと新幹線に乗りました。布鞆姿の私に、隣の人が話しかけてきました。

「お坊さんですね。いいものを見せてあげましょか」

と言って、ポケットから黒く三角で、とがった念珠を取り出しました。お

坊さんですから、念珠はいろいろもっています。持つて手が痛いよ

うな念珠は実用的ではありません。私が持つている念珠は木の実か、ガ

ラスのような軽くて、丸いものです。「手に持つたら痛いし、手に持つて転

んだりしたら怪我をするでしょう」と、皮肉を込めて申しました。す

るとその人が、「手で握つたら痛いのです。握つて、

痛い思いをするたびに私の言葉や態度が、人さまを傷つけているのを

反省するのです」

「これは菱の実といって、大きな池には

えている水草です。その根が菱の実で、黒い牛のような顔をして二本の角が、

とがっている形をしているのです」「あなたにこの念珠を差し上げますよ」

とその念珠を私の手に握らせました。それほど痛いとは思っていませんでした

が、まこと手のひらに突きたちます。「ばらの花にはとげがある とげがあ

るのに花が咲く 私心はとげだらけなむあみだぶの花が咲く」という

念仏者の詩の話は、しようちゅうしながら、私の言動によつて、他の人がど

れだけ傷ついているかは、思いもしなかつたのでした。(中略)

人間に一番見えないものは、自分の内面とご恩と聞きます。自分の心が見

えたら、顔を上げて道を歩くことではきないでしょう。肉や魚が美味しい方

は畜生さながらの心をもっているの

す。ご恩がわからない目をもっているのは地獄の心でしょう。人の持ち物をうらやましく思うのは餓鬼の心でしょう。

親鸞聖人のお手紙や和讃に「無眼人・無耳人」という『目連所問経』のお言

葉が出てきます。盲目の人や難聴の人のことではありません。眼がありながら

ご恩が見えない人、自分の内心の醜さが見えない人のことです。

「実るほど頭の下がる稲穂かな」と世間で申します。世間でも本当にできた

人物は、自己を省みて恥ずかしく思うのだと聞きました。エジソンは発明王と

して名高い方ですが、浜辺の砂を拾つて、「私の発見したのは手にした砂のような

もの。未知の世界はどこまでもつづく砂浜の砂粒みたいに際限がない」と弟子

に語つたそうです。

『浄土真宗 やわらか法話2』(本願寺出版社)より引用

掲載文字数の関係で、一部中略してご紹介しています

※「恩」とは「因」+「心」と書くように、「私の為にいったい何がなされたかを知り、そのことを深く心にとどめていく」ということでしょう。住職



穢れている世界「穢土」

本願寺派 勸学 内藤 知康

まず浄土の語義ですけれども、「浄」は「浄らか」という意味です。浄らかというのは当然汚れてい

るのに対してきれいだということですから。「汚れている」より「穢れている」という言い方が仏教においては

普通なわけですが、「穢れている世界」これが「穢土」という言葉で

表現されます。そして浄土と穢土と対比される時、一体何が穢れな

のか。(中略) 仏教においては煩惱を穢れとします。煩惱という言葉

自体もわかりにくいですが、わかりやすくいうと、煩惱の根本にあるのは自己中心性です。もつとわ

かりやすくいうと「自分さえよければいい、他人はどうなってもいい」という考え方や思いです。私たちの

一番根つこのところにそういう思い

があるわけでは、私たちが他の人のことを考えるのは、普通は余裕のある時

です。余裕がなくなってしまうと自分さえよければいいということになります。ですからたとえば他人のために自分を犠牲にするというのは、人間の本性からいうと非常に珍しいことになり

ます。母親が子どものためにそういう行動を起こす、というのはよくあります。

ただしそれも自分の子どものためだけです。他人の子どもはどうでもいいということになってきますから、結局それも考えてみると自分さえよければいいと、他人はどうなってもいいと同じこと

です。あるいはお国のために命を捨てるといふことがありますけれども、その国は自分の国ですね。他の国のために

命を捨てるというのは基本的にはあり得ません。ですから自分という枠が非常に小さくなると、その中に自分一人

しかいなくなります。その枠が広がってくると、その枠の中にはたくさん入ってくるわけですが、自分さえよければ他人はどうなってもいいという考え方が基本としてあります。非常に広く広がった

時には、その枠の中に人間が全部入ってきます。そして人類の幸せのためには他の動物はどうなってもいいんだというよ

うな考え方が出てきます。動物実験は普通に行われております。医学の進歩は人類の幸福である。だから人類の幸福のために他の動物は犠牲になるべきだ

という考え方は、これは自分という枠を非常に広げた場合のことですけれども、仏教から見ると、自分という枠が自分一人だけの場合と、ある意味で同じ事なんです。命は全部平等であつて、人間の命だけ尊いということはないとい

うのが仏教の教えですから。その自己中心性が基本的には「穢れ」であり、そういう考え方に穢された世界を穢土とい

います。

『阿弥陀仏と浄土』(法蔵館)より引用

一部を中略して紹介しています



いのちの行方

本願寺派 勸学 梯 實圓

普通、私たちは、「生まれ、やがて死ぬ」と考えてしまいます。しかし、「死ぬ」のではなく、「生まれて行く」ということもあるのです。

この世へ生まれてくることを、私たちは「誕生」といいます。そして、仏さまの世界へ生まれて行くことを、「往生」といいます。誕生と往生、どちらも生まれることです。往生は、死ではありません。この世へ誕生してきたら、今度は仏さまのさとの境地に生まれて行く。ですから、浄土へ「生まれる」のであって、「死ぬ」ではありません。

阿弥陀さまに出遇った人は、阿弥陀さまの限りない「いのち」の世界へ生まれて行くのだという信念が恵まれます。この信念がはっきりと確認されれば、「生きることも結構

だが、死ぬことも滅びではない。限り

ない『いのち』の世界に生まれて行くことなのだ。これは有難いことではないか」という世界が開けてきます。生まれてきたことを「おめでとう」と言うのなら、往生することも「おめでとう」と送つてあげたらいいのではないのですか。

私はそのように送られたいと思います。限りない智慧の光をもつて私を導き、限りない「いのち」の世界に心の視野を開いて、死ぬのではなく「生まれて行く」という信念を与えてくださる喚びかけの言葉が、「南無阿弥陀仏」という言葉なのです。（中略）

私たちは、私たちを護り続け、お浄土へ導き続けていてくださる仏さまに包まれて生きているのです。生きるも死ぬも仏さまの「いのち」の中である、仏さまの「いのち」に包まれて生き死にしているということを、一人ひとりがはっきりと確認する。

どのように確認するのかと言えば、こ

れは自分でわかるのではありません。向こうから喚びかけられている言葉によってわかるのです。「お前は私の智慧の光に導かれながら生きていくのだよ。この限りない『いのち』の世界へ還ってくるのだよ」という言葉を聞いて、「そうですか。

私は今どこに生きていて、死ぬとどうなるのかわからなかったけれども、それでわかりました」といただいでいく。仏さまが私たちに名告り出で、その名告りがそのまま私たちにとつて、南無阿弥陀仏というのが何ものであるかということを知らせていくのです。「お前をたすけて、お浄土へ連れていく。お前の心を開いて、お浄土へ導いていく。そういう親だよ」と仏さまが私たちに名告り出

てくださる、これが実は「南無阿弥陀仏」という言葉が表している意味なのです。ですから、このことを聞く以外に真宗の教えはありません。

『親鸞聖人の南無阿弥陀仏』（自照社出版）より引用

一部を中略してご紹介しています



聞く念仏

本願寺派 布教使 豊島 学由

言葉は聞くのが本義です。そのた

めに耳が口の二倍あるのです。言葉

は語るものといえます。確かに語る

ものなんです。聞くことが本義な

んです。ですから、本義である聞

くことを忘れて話す、自分の話し

ていることを聞かないで話すという

ような状態は、非常に危険です。(中

略) 例えば、どういいうときにそう

なるかという、ケンカをしている

ときです。争うときには、いちいち

自分のいつていることを聞いていま

んね。聞いていたら負けてしまいま

す。ケンカは勝たなくてはならない

から、勝つためには自分のいつている

ことを、いちいち味わっていられま

せん。非常に危険な状態なんです。

そして、自分のいつていることを

全然聞いていない状態は、ケンカだ

けではありませんね。自慢していると

きもそうでしょう。ウソをついていると

きもそうでしょうね。ウソをついている

のを聞きながらしゃべってごらんさい。

恥ずかしくてしゃべれません。平気でウ

ソをつく人は、全然自分のいうことを

聞いていないんです。自慢している人も

そうです。自分のいつていることを聞き

ながら自慢してごらんさい。恥ずか

しくておれません。

楽しく酒を飲むのはいいですよ。で

も、度を越すと酒に飲まれるんですね。

「酔ってないぞ」、これをいい出したら危

ないですね。「もうあかん、まいりまし

た」、これも酔ってはいるけれど、まだ

酔っている自己を知っているんです。酔っ

ていないと主張し出したら、相当酔っ

ているんです。「オレはいくら酔っていても、

いったことはちゃんと覚えてる。責任

はもつ」。そういつておきながら、翌日、

いったことをケロッと忘れて平気なんで

すね。酔っている状態というのは、酒だ

けではありません。特に宗教に酔ってい

るときが、最も危ないですね。

浄土真宗の信心は、酔うのではない

んです。むしろ、目覚めるのです。で

すから、信心の本義は、名号を聞く

ことです。名号は言葉です。言葉な

ればこそ、称えられるんです。つまり

「南無阿弥陀仏」というお念仏は、如来

さまなんです。如来さまが言葉になつて

くださった。言葉の如来さまが、南無

阿弥陀仏なんです。

だから、言葉の本義である聞くこと

を忘れて、称えることに力を入れると、

自力の念仏になります。自力では助か

らないわけは、人間の念仏だからです。

真宗の念仏は、如来さまの念仏です。

如来さまが言葉になつてくださったんで

す。言葉の如来さまなればこそ、称え

るまま私をよんでくださったっていると聞い

ていくのです。聞く念仏です。

『人間の願いと如来の願い』(本願寺出版社)より引用

一部を中略してご紹介しています